

『日本語歴史コーパス 江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃』副本文の形態論情報の概要

2020年4月30日 片山久留美

はじめに

『日本語歴史コーパス 江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃』では、掛詞や洒落、物尽くしなど、本文の同一箇所にも複数の意味を持たせている部分について形態論情報の多重化（複線化）を行っている。これにより、修辞上の複数の読み（語）を「中納言」の検索対象とすることが可能となった。本稿では、多重に形態論情報を付与する箇所について、その認定基準および形態論情報付与基準の概要を述べる。

1. 形態論情報を多重に付与する箇所の認定基準

『新編日本古典文学全集』および近松全集刊行会編（1985-1996）『近松全集』（岩波書店）の注記に記載のある箇所を中心に、掛詞・洒落・物尽くしと考えられるものについて多重に形態論情報を付与した。ただし、『日本語歴史コーパス』の短単位規程上、掛ける語・掛けられる語が同じ語彙素になる場合は、多重に形態論情報を付与することはしない。

【例】

露の憂き身の置き所 サアここに極めんと 上着の帯をとく兵衛①も、はつも涙の染め小袖②（曾根崎心中・曾根崎天神の森の場）

①『新編全集』注「「解く」と「徳兵衛」をかける。」

→「解く」「徳兵衛」は別語彙素なので多重に形態論情報を付与

②『新編全集』注「「染め小袖」に、涙をそめる意をかける。」

→「染め小袖」の「染め」は形態論情報の規定上、動詞「染める」の連用形となる。

「涙に染める」の方と同じ語彙素となるため、多重に形態論情報を付与しない。

2. 主本文・副本文の決め方

本コーパスでは、多重に形態論情報を付与した箇所について、主たる文脈を担う語の方を「主本文」、従となる語の方を「副本文」と呼ぶ。原則として、該当箇所の後ろの語句・文脈とのつながりがある方を「主本文」とする。この原則によっても意味を一つに特定できないときは、文脈全体から自然な解釈を選ぶ。

坂本（1987）の近松世話物浄瑠璃における掛詞の分類を参考に、以下に本コーパスでの掛詞の処理の実例を挙げる。

A. 掛ける語と掛けられる語とが同音同拍で兼用されるもの

【例】

姉が手を引く、乙は抱く中は父親肩くまにのりの教へも一つは遊山、群集を分けてぞ急ぎける

主本文：語彙素「法（ノリ）」名詞-普通名詞-一般（51-近松 1721_05001,51690¹）

副本文：語彙素「乗る」動詞-一般/文語四段-ラ行/連用形-一般

B. 掛ける語と掛けられる語とが同拍だが、一部分異なる音のあるもの

【例】

余所に聞きしも今はまた、余所にあらしの身にぞしむ

主本文：語彙素「嵐」名詞-普通名詞-一般（51-近松 1706_12003,29770）

副本文：語彙素「有る」動詞-非自立可能/文語ラ行変格/未然形-一般

語彙素「じ」助動詞/文語助動詞-ジ/連体形-一般

C. 掛ける語と掛けられる語とが異拍で、かつ兼用部分は同音のもの

C-1. 内包型：掛ける語・掛けられる語が第一拍目から重なるもの

【例】

馬も太鼓をうつくしき踊り浴衣の上から下まで、色めき喜び賑はへり

主本文：語彙素「美しい」形容詞-一般/文語形容詞-シク/連体形-一般

（51-近松 1707_07003,37080）

副本文：語彙素「打つ」動詞-一般/文語四段-タ行/連体形-一般

C-2. 鎖型：掛ける語の下部と掛けられる語の上部が兼用されるもの

【例】

いざ急がんとちよこ / \ 走り、とはかは口にぞ着きにける

主本文：語彙素「川口」名詞-普通名詞-一般（51-近松 1707_01001,3550）

副本文：語彙素「とわかかわ」副詞

基本的には上記のように主本文・副本文を決定するが、校訂本文の表記・語形が本来「主本文」とすべき語のそれとして不自然な場合（掛詞のためだけに UniDic に新規に語形登録を必要とする場合）は、もう一方の語の方を「主本文」とすることがある。

【例】

塵も灰も猫も値打ちににやん匆五分と飛んで時鳥

主本文：語彙素「にゃん」副詞（51-近松 1718_04002,1400）

副本文：語彙素「何」名詞-数詞

気のとつさかな姑にせり / \ いぢりたでられて

主本文：語彙素「蓼」名詞-普通名詞-一般（51-近松 1722_21003, 52860）

副本文：語彙素「立てる」動詞-一般/下一段-タ行/未然形-一般

¹ 主本文の語の「中納言」におけるサンプル ID と開始位置を記載する。

| | | | | | | | | | |
|---------|------------|---|---|--------|------------|--------|------------|--------|---|
| 主本文 品詞 | 名詞-普通名詞-一般 | | | 助詞-格助詞 | 名詞-普通名詞-一般 | 助詞-格助詞 | 名詞-普通名詞-一般 | 助詞-係助詞 | |
| 主本文 語彙素 | 肩 駒 | | | に | 法 | の | 教 へ | も | |
| 校訂本文 | 肩 | く | ま | に | の | り | の | 教 へ | も |
| 副本文 語彙素 | | | | 乗る | | | | | |
| 副本文 品詞 | | | | 動詞-一般 | | | | | |

| | | | | | | | | | | |
|---------|------------|--------|--------|---|---|---|------------|---|---|---|
| 主本文 品詞 | 名詞-普通名詞-一般 | 助詞-格助詞 | 形容詞-一般 | | | | 名詞-普通名詞-一般 | | | |
| 主本文 語彙素 | 太 鼓 | を | 美 しい | | | | 踊 り | | | |
| 校訂本文 | 太 | 鼓 | を | う | つ | く | し | き | 踊 | り |
| 副本文 語彙素 | | | 打 っ | | | | | | | |
| 副本文 品詞 | | | 動詞-一般 | | | | | | | |

図 1 主本文・副本文の形態論情報付与イメージ

3. 副本文に対する形態論情報付与基準

副本文となる語に対しても、基本的には主本文と同様の規定に基づき語彙素・品詞・活用形などの形態論情報を付与する。ただし、一部に副本文特有の処理を行った箇所があるので、以下に述べる。

3.1 掛詞断片

2のC-2に挙げた鎖型の掛詞の場合、主本文の語を後ろの語句とのつながりによって認定すると主本文に意味を成さない語の断片が残ってしまうことがある。このような場合、該当部分の主本文の品詞を「掛詞断片」、語彙素は空欄（なし）としている（図2）。

| | | | | | | | | | | |
|---------|------------|---------|---------|------------|--------|--------|---|---|---|---|
| 主本文 品詞 | 名詞-普通名詞-一般 | 補助記号-読点 | 掛詞断片 | 名詞-普通名詞-一般 | 助詞-格助詞 | 助詞-係助詞 | | | | |
| 主本文 語彙素 | 走 り | 、 | | 川 口 | に | ぞ | | | | |
| 校訂本文 | 走 | り | 、 | と | は | か | は | 口 | に | ぞ |
| 副本文 語彙素 | | | と わ か わ | | | | | | | |
| 副本文 品詞 | | | 副 詞 | | | | | | | |

図 2 「掛詞断片」のイメージ

3.2 副本文の語が活用語の場合の活用形

3.2.1 活用形を空欄とするもの

副本文となる語が活用語の場合、基本的には主本文と同様に活用形の情報を付与するが、以下の例のように、語の一部のみが表記上に現れており特定の活用形が想定できない場合がある。この場合、副本文の語の活用形は空欄（なし）とする。

【例】

二人の親の顔までもしかまのかち路、はり磨瀧

主本文：語彙素「シカマ」名詞-固有名詞-地名-一般（51-近松 1707_01002,1320）

副本文：語彙素「鬻める」動詞-一般/文語下二段-マ行/（活用形：空欄）

お夏は魂もぬの子の袖に入るばかり

主本文：語彙素「布子」名詞-普通名詞-一般（51-近松 1707_01002,44940）

副本文：語彙素「抜ける」動詞-非自立可能/文語下二段-カ行/（活用形：空欄）

※CHJの短単位規程では、動詞型活用語の「語幹」を活用形として認めていない。

3.2.2 活用形の情報を付与するもの

3.2.1に当たるもの以外は、活用形の情報を付与する。ただし副本文の語は後続の文脈とは接続しないものが多いため、活用形の認定に基準が必要となる。その認定基準を以下で述べる。

3.2.2.1 特定の活用形でしか処理できない場合

表記・形態上、副本文の語として特定の活用形しか想定されない（他の活用形になりえない）場合、文脈等にかかわらず当該の活用形で処理する。

【例】

姉が手を引く、乙は抱く中は父親肩くまにのりの教へも一つは遊山、群集を分けてぞ急ぎける

主本文：語彙素「法（ノリ）」名詞-普通名詞-一般（51-近松 1721_05001,51690）

副本文：語彙素「乗る」動詞-一般/文語四段-ラ行/連用形-一般

いやなう、世間の心中とそれは違ひがあら金の金銀づくの勤めの身、

主本文：語彙素「粗金」名詞-普通名詞-一般（51-近松 1707_14002,13690）

副本文：語彙素「有る」動詞-非自立可能/五段-ラ行/未然形-一般

札所 / \ の霊地霊仏、めぐれば罪もなつの雲、あつくろしとて、

主本文：語彙素「夏」名詞-普通名詞-一般（51-近松 1703_11001,940）

副本文：語彙素「無い」形容詞-非自立可能/形容詞/語幹-一般

3.2.2.2 未然／連用同形、終止／連体同形の場合

副本文の活用語が一段活用・二段活用など未然形と連用形が同形になる場合、また四段活用など終止形と連体形が同形になる場合は以下の基準によって活用形を認定する。

① 主本文・副本文が同音・同拍の動詞→後続語により判断（主本文の活用形に合わせる）

【例】

春永にいよしも変らぬ御見まで逢ふ瀬をちぎる餅は杵ついて離れぬお客を祝ひ

主本文：語彙素「ちぎる」動詞-一般/文語四段-ラ行/連体形-一般

(51-近松 1712_08001,2850)

副本文：語彙素「契る」動詞-一般/文語四段-ラ行/連体形-一般

顔を見られじと戸口も見世もあけやらぬ星も夜ぶかき親の恩、

主本文：語彙素「明ける」動詞-一般/文語下二段-カ行/連用形-一般

(51-近松 1718_04003,810)

副本文：語彙素「開ける」動詞-一般/文語下二段-カ行/連用形-一般

② 主本文・副本文が同音・同拍だが、主本文の語が非活用語の場合 →連用形／連体形を優先

【例】

落首洛外とりノゝにその一節をゑ草紙や

主本文：語彙素「絵」名詞-普通名詞-一般 (51-近松 1712_09001,650)

副本文：語彙素「得る」動詞-非自立可能/文語下二段-ア行/連用形-一般

そら寒き夜に是非に泊れと、ゆふ霜の、おくの炬燵にふとんとこけて

主本文：語彙素「奥」名詞-普通名詞-一般 (51-近松 1707_07003,42620)

副本文：語彙素「置く」動詞-非自立可能/文語四段-カ行/連体形-一般

③ 主本文・副本文の語が異拍の場合 →連用形／連体形を優先

【例】

戌の顔見世朝木戸をあけぼの深く、提灯の影きらノゝと

主本文：語彙素「曙」名詞-普通名詞-一般 (51-近松 1706_12001,300)

副本文：語彙素「開ける」動詞-一般/文語下二段-カ行/連用形-一般

と言へば頭かく介仏頂面

主本文：語彙素「カクスケ」名詞-固有名詞-人名-名 (51-近松 1712_08002,25730)

副本文：語彙素「搔く」動詞-一般/文語四段-カ行/連体形-一般

※なお下記のような例では未然形と認める。

思ひほころぶ袖口をくけん阿波座の野良鳥

主本文：語彙素「クケン」名詞-固有名詞-地名-一般 (51-近松 1708_02001,1420)

副本文：語彙素「縮ける」動詞-一般/文語下二段-カ行/未然形-一般

語彙素「む」助動詞/文語助動詞-ム/連体形-撥音便

3.3 副本文の語が活用語の場合の活用型

『日本語歴史コーパス』の江戸時代編では、本文種別により活用語の活用型を使い分けられている(村山 2019)。副本文の語の活用型は、主本文の本文種別に従って決定する。原則として本文種別が「会話」の場合は口語活用、「会話」以外の地の文などの場合は文語活用を使用する。

3.4 副本文の「発音形出現形」について

副本文の「発音形出現形」は、主本文のそれと一致させる。副本文の語としては本来考えにくい発音形になったとしても、主本文の発音形に揃える。

【例】

塵も灰も猫も値打ちににやん匆五分と飛んで時鳥

主本文：語彙素「にゃん」副詞 発音形出現形「ニヤン」(51-近松 1718_04002,1400)

副本文：語彙素「何」名詞-数詞 発音形出現形「ニヤン」

余所に聞きしも今はまた、余所にあらしの身にぞしむ

主本文：語彙素「嵐」名詞-普通名詞-一般 発音形出現形「アラシ」

(51-近松 1706_12003,29770)

副本文：語彙素「有る」動詞-非自立可能/文語ラ行変格/未然形-一般

発音形出現形「アラ」

語彙素「じ」助動詞/文語助動詞-ジ/連体形-一般 発音形出現形「シ」

【参考文献】

上野左絵 (2016) 「近松浄瑠璃のコーパス化—語りのテキストをどう扱うか」『じんもんこん 2016 論文集』 pp.25-30

坂本清恵 (1987) 「義太夫節の掛詞—近松世話物浄瑠璃譜本を資料にして—」『国文学研究』 93号 pp.42-56

村山実和子 (2019) 「『日本語歴史コーパス江戸時代編 I 洒落本』『同 江戸時代編 II 人情本』形態論情報の概要」 https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/doc/morph-edo-2019.pdf